

## I まとめ

新体力テスト結果や児童生徒質問紙、学校質問紙調査結果及び相関分析等の総括を以下に示す。

### 体力調査について

#### 1 体力合計点と総合評価の推移について（p 8～10）

過去3ヶ年の体力合計点の推移をみると、小学校1年男女及び小学校2年男子以外の全校種全学年で平成27年度の記録が一番高く、改善傾向であると言える。

また、小学校4年生女子においては総合評価D+Eの割合がやや増えたものの、小学校4年生、中学校1年生、高校2年生男女すべてにおいて、A+Bの割合が平成26年度より向上した。

- ・各学校での取組の成果が確実に表れてきている。
- ・今後は、**D・E層の底上げ**を一層図っていくために、該当する児童生徒たちへの**個に応じたアプローチ**を工夫するなど、体育授業や体力向上の取組等を改善し、すべての児童生徒に運動の楽しさを味わわせていく必要がある。

#### 2 各地区の体力合計点について（p 11～13）

平成26年度と比較すると、小学校4年生男子、中学校1年生男子、高校2年生男女は全地区、中学校1年生女子は6地区、小学校4年生女子は5地区において、体力合計点が向上した。

また、地区間の差については、小学校4年生女子、中学校1年生女子、高校2年生男女で縮まった。

- ・今後も継続して分析を行うとともに、**データを蓄積・検証する仕組みづくり**など、市町村教育委員会や学校、各体育（保健体育）研究団体等における体制整備を図る必要がある。
- ・同一中学校区における小学校と中学校など、**校種間の連携**をより強化していく必要がある。
- ・各地区の成果と課題を明確にし、各地区で開催される研修会等で改善策を検討するなど、それらを生かした取組を推進していく必要がある。

#### 3 各実技種目の状況について（p 14～27）

平成26年度と比較すると、小学校において長座体前屈、50m走はすべての学年男女、反復横とび、20mシャトルラン、立ち幅とびはほとんどの学年男女において向上が見られた。中学校において握力、上体起こし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルラン、50m走、立ち幅とび、高校において長座体前屈、反復横とび、50m走は、すべての学年男女において向上が見られた。しかしながら、小学校の握力、ソフトボール投げ、中学校・高校のハンドボール投げにおいては、平成26年度と比較してほとんどの学年男女において低下した。

- ・多くの種目に、各学校での取組の成果が表れてきている。
- ・投力については、ボールを投げる経験や頻度の少なさが原因として考えられるので、引き続き**効果的な環境づくりや授業等の改善**が望まれる。

## 児童生徒質問紙調査について

### 1 運動習慣について（p 28～48）

運動部やスポーツクラブに所属している児童生徒の割合は、小学校4年生女子において、平成26年度と比較して増加している。しかし、男女差をみると、小学校4年生、中学校1年生、高校2年生すべてにおいて、依然として女子が男子を大きく下回っている。所属している児童生徒は、男女とも体力合計点が高く、所属している児童生徒とそうでない児童生徒との体力合計点の差は、学年が上がるにつれて大きくなる傾向にある。

また、運動やスポーツをほとんど毎日行っている児童生徒の割合は、高校2年生男女において、平成26年度と比較して増加している。しかし、男女差をみると、小学校4年生、中学校1年生、高校2年生すべてにおいて、依然として女子が男子を大きく下回っている。ほとんど毎日行っている児童生徒は、男女とも体力合計点が高く、ほとんど毎日行っている児童生徒とそうでない児童生徒との体力合計点の差は、学年が上がるにつれて大きくなる傾向にある。

また、運動部やスポーツをするときの1日の実施時間が「2時間以上」と回答している児童生徒の割合は、高校2年生男女において、平成26年度と比較して増加している。しかし、男女差をみると、小学校4年生、中学校1年生、高校2年生すべてにおいて、依然として女子が男子を大きく下回っている。運動部やスポーツ実施時間が長い児童生徒ほど、男女ともに体力合計点が高かった。

- ・ 今後も、引き続き**運動を好まない女子へのアプローチ**及び**女子生徒のニーズに応じた運動部活動**などの工夫・改善が望まれる。
- ・ そのために、これらの児童生徒が**運動を好まない要因**や**運動部活動に求める要素**等を把握することが必要である。

### 2 生活習慣について（p 49～69）

生活習慣においては、小学校4年生、中学校1年生、高校2年生男女すべてにおいて、朝食摂取と体力との関連が強かった。また、小学校4年生において、睡眠時間が長いほど体力合計点が高かった。さらに、中学校1年生及び高校2年生において、テレビ視聴時間が短いほど体力合計点が高かった。

- ・ このことを踏まえ、引き続き、「体力向上のためには**規則正しい生活習慣の定着が必要**であること」を家庭に対して啓発していく必要性がある。

## 学校質問紙調査について

### 1 体育の授業以外での取組について（p 70～77）

平成26年度と比較すると、全校種において「継続的な取組」を行っている学校の割合が減少した。「取り組んでいない」中学校が35.0%、高校が45.0%と依然として多く、校種間に取り組の差がみられた。

また、運動習慣確立のための取組を行っている学校においては、小・中学校において「保護者への働きかけ」を行っている学校が最も多かった。しかしながら、「取り組んでいない」中学校が32.2%、高校が56.8%という高い割合を示した。

- ・体力の向上に関しては、学校での取組が関与していることが推察されるので、中学校・高校においても「1校1取組」運動を中心に計画的かつ継続的に取り組んでいく必要がある。
- ・中学校・高校の女子の運動実施率が低いことを踏まえると、今後、**中学校・高校において女子に対する取組**を推進する必要がある。
- ・運動習慣の定着を図るため、学校、家庭、地域が連携した取組を推進することが必要である。

### 2 体育の授業での取組について（p 78～84）

体育の授業での取組については、全校種ともに「運動量の確保」が最も多かった。平成26年度と比較すると、小学校では「運動量の確保」、「個人差を踏まえる」や「運動を習慣化させる」が、中学校・高校では「指導の充実」の割合が増加し、授業改善が図られていることが分かる。

- ・平成26年度と比較して、ほとんどの校種・学年・男女の体力が向上していることから、**体育授業での取組は重要**であることがうかがえる。
- ・今後も継続して、取組の**分析結果に基づく授業改善**を図っていく必要がある。

### 3 体力テストの結果を踏まえた取組について（p 85～91）

結果を踏まえた取組については、全校種とも「体育の授業の改善」が最も多く、特に中学校は92.9%、高校は89.2%と高い割合を示している。

また、平成26年度と比較すると、全校種において「体育の授業以外での取組」を行っている学校の割合が増加した。しかしながら、その割合は、小学校の73.6%に対して、中学校が36.5%、高校が24.3%と依然として少なく、校種間に取り組の差がみられた。

- ・**体育の授業改善**を中核として、体育の授業以外での取組を各学校の教育活動全体で行うなど、**複合的な取組**を計画的かつ継続的に行っていくことが必要である。